

2019年のS型ワムシ大分株の培養 (栽培漁業センター生産事業)

木村基文*, 伊藤寛治*1, 山内 岬, 島袋誠菜

ハマフエフキ, ヤイトハタ, スギ, マダイの種苗生産初期に生物餌料として用いる小型のS型ワムシ大分株(以下, ワムシ)を大量培養し, 栄養強化後に安定供給する. また, 種苗生産終了後は, 引き続き一次培養水槽において種保存を行う.

材料及び方法

培養には, 2018年度より一次培養中のワムシを使用した.

培養中は, 午前8時に万能投影機を用いてワムシの活性状況を観察した後, 培養密度(1mL当たり個体数)を計数した. 培養水温は, 午前8時30分に水槽水温モニターの表示水温を記録した. 培養における記録項目は, 保有量, 栄養強化数量, 種苗への投与量, ワムシ培養に用いた餌量等を記録した.

一次培養は貝類棟20kLFRP角形水槽(以下, A水槽)3面, 甲殻類棟5kLFRP角形水槽(以下, S水槽), 栄養強化は餌料培養棟の1kLアルテミアふ化槽10面を使用した.

培養海水は, 砂濾過海水を使用した. 培養方法は, パッチ方式と間引き方式の2通りの培養方式を併用し, 培養4~7日毎に植え継ぎを行った. A水槽の培養容積は5~8kL, 深さ25~38cmであった.

餌は, 栽培漁業センターで培養, 濃縮後に冷蔵保存した濃縮ナンノクロロプシス(以下, CN), クロレラ工業株式会社の生クロレラ-V12(以下, V12), ハイグレード生クロレラ-V12(以下, HG)を用いた(木村ほか, 2021). また, 栄養強化剤には, スーパー生クロレラ-V12(以下, SV)を追加した. 一次培養の給餌は, 9時, 13時, 15時, 17時に各餌を添加した. 栄養強化の給餌は, 直接添加と保冷水筒を利用した定量滴下による連続給餌を行った. 給餌量の目安は, ワムシ1億個体当たりCN(50億換算)が2.0~2.5L/日, V12・HG及びSVが0.2~0.25L/日とした.

培養時の通気は, 水槽側面両底に設置した塩ビパイプ(直径16mm)に開けた1~2mmの穴及び水槽底面中央に設置したユニホースより海水が充分攪拌される空気量を通気した.

浮遊物除去用のゴミ取りマットは使用を取りやめた.

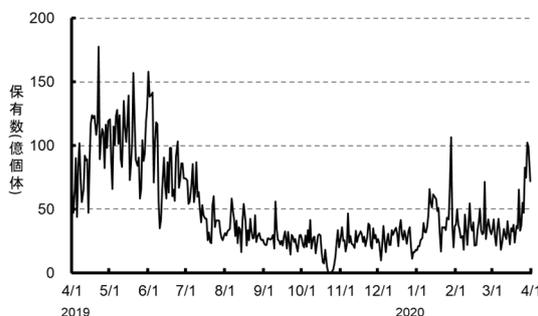


図1 S型ワムシ大分株保有数の推移

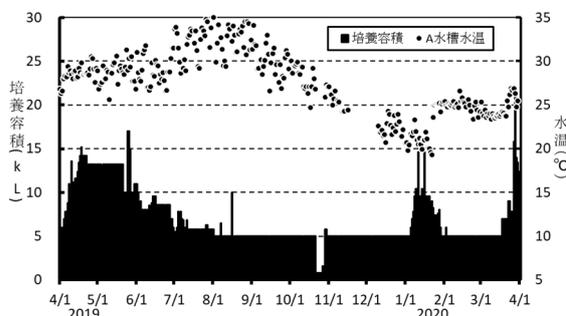


図2 S型ワムシ大分株培養水量と培養水温の推移

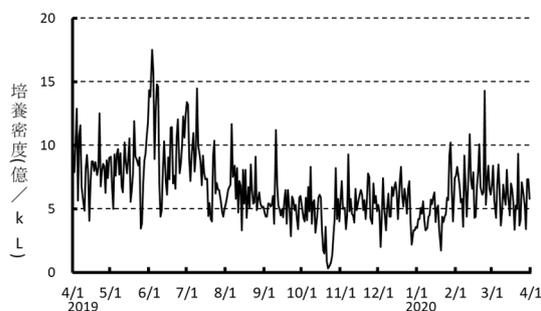


図3 S型ワムシ大分株培養密度の推移

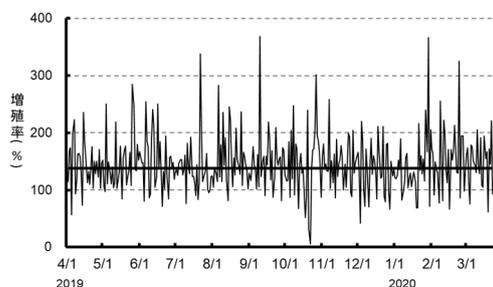


図4 S型ワムシ大分株の日間増殖率の推移

$$\text{日間増殖率} = \frac{\text{当日保有数}}{\text{前日保有数} - \text{前日使用数} - \text{前日廃棄数}} \times 100$$

*E-mail : kimuramt@pref.okinawa.lg.jp

*1 : 担当者, 水産課水産企画班

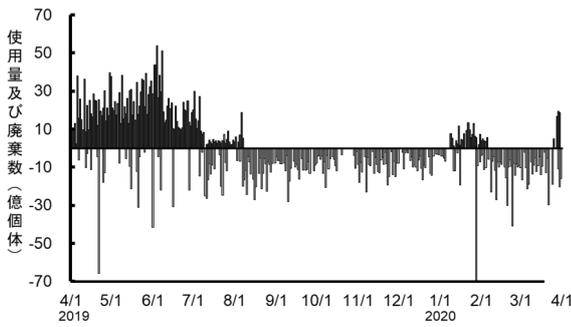


図5 S型ワムシ大分株の魚類への投与量、廃棄数の推移

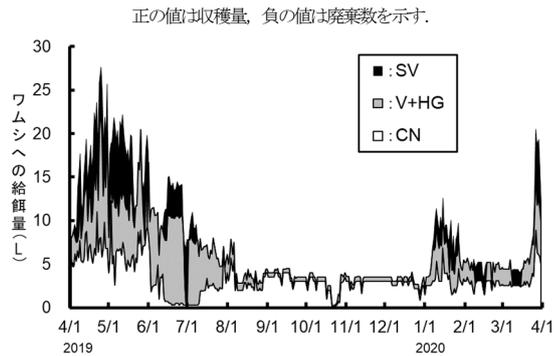


図6 S型ワムシ大分株の培養に使用した各餌の推移

CNの給餌量はY軸給餌量の10倍とする。

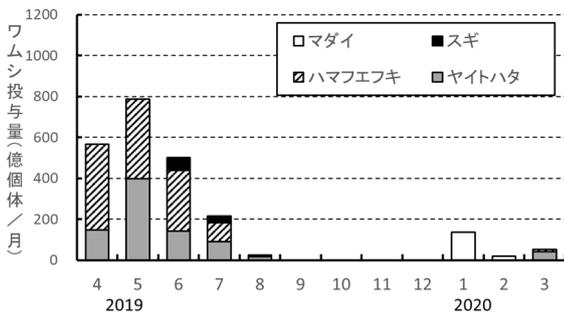


図7 魚種別の種苗生産に使用したワムシ投与量の推移

結果及び考察

一次培養、栄養強化合計したワムシの保有数は、25～150億個体の範囲で推移し、種苗生産に必要なワムシを概ね安定的に供給することができた(図1)。ワムシの最大保有数は2019年4月22日の178億個体、最少保有数は10月22日の0.27億個体であった(図1)。ワムシの培養容積は、種苗生産時に5～13kL、種保存時に5kL、培養水温は20～35℃の範囲であった(図2)。2020年1月21日以降は培養水温が20℃以下となり増殖率が低下したため、ボイラーを起動し、設定温度を24～25℃とした。ワムシの培養密度は、種苗生産時に750～1,000個体/mL、種保存時に500個体/mLであった(図3)。1年間を通じたワムシの平均日間増殖率は146%であった(図4)。日当たり最大使用量は2019

年6月4日の53億個体であった(図5)。

ワムシの培養不調が2019年10月21日に発生した(図1～4)。培養密度が急激に低下し、増殖率も低下したため、A水槽での培養から1kLアルテミア孵化水槽での培養に切り換えた。ワムシをアルテミア水槽で7日間培養し、増殖させA水槽に戻し、その後は通常通り培養することができた。S型ワムシ大分株は安定的に培養できる株であるため、培養不調の原因は特定できないが、植え継ぎ指示のミスなど飼育管理上の不手際があったものと思われる。また、2020年1～2月に20℃以下への水温低下に伴い増殖率が低下したため、培養容積を増やすと共に培養水温を24℃以上に上げてマダイへのワムシ供給量を確保した。

ワムシに与えた各餌の日毎の供給量を図6に示す。種苗生産期間中の4～6月中旬はCN, V12, HG, SVを餌として与えた。金城ほか(2005)は、V12を主な餌として一次培養し、二次培養でDHA強化したワムシをスギに与えることで種苗生産成績が向上したことを報告しているため、2019年6月10日～7月10日までのスギに供給するワムシの餌は、V12, SVを主体に与えた。一方、ハマフエフキについては、中村ほか(2020)が、V12, HGで一次培養し、二次培養でSV強化したワムシを仔魚に与えると著しい初期減耗を引き起こすことを報告しているように、経験的に栄養強化は種苗生産成績に悪い影響を及ぼすと考えられている。そのため、ハマフエフキに供給するワムシは、A水槽においてCNを主体に一次培養したワムシを収穫し、直接種苗生産に用いた。

種保存期間8～1月までのワムシの餌には、CNを主な餌として日量約20L与えた。

魚種の種苗生産に合計2,297億個体のワムシを使用した。種苗生産に使用したワムシの種毎、月毎の推移を図7に示す。種毎の内訳は2019年3～7月のハマフエフキ1,253億個体、4～7月のヤイトハタ839億個体、6～7月のスギ103億個体、2020年1月のマダイ157億個体であった。種苗生産及び種保存中に生産調整のため廃棄したワムシ数は種苗生産期間中828億個体、種保存中1,647個体であった。

A1～3, S5・6水槽におけるワムシの水槽別日毎の培養日齢を表1に示す。種苗生産期間中4～7月のワムシの植え替えは5日毎に行われていた。この間の各水槽の日毎培養海水容積を表2に示す。培養容積は5～7kLの範囲で、日当たり合計培養海水量は15kL前後であった。

文 献

- 金城清昭, 井上 颯, 木村基文, 上田美加代, 本永文彦, 鳩間
用一, 仲原英盛, 濱川 薫, 真境名真弓, 2005: スギの種
苗量産試験. 平成 13・14 年度沖縄県栽培漁業センター事業
報告書 14, 104-107.
- 中村勇次, 伊藤寛治, 勝俣亜生, 善平綾乃, 鮫島翔太, 2020:
2017 年のハマフエフキ種苗生産・二次飼育. 平成 29 年度
沖縄県栽培漁業センター事業報告書 28, 19-21.
- 木村基文, 諸見里 聡, 山本隆司, 2021: 2019 年のナンノク
ロロプシス培養と濃縮液の使用状況. 平成 31 年度沖縄県栽
培漁業センター事業報告書 30, 15-18.